

親鸞聖人の教え

## 序

二〇一二（平成二十四）年度の寮員会議において、すでに勸学寮から出版されている『真宗の教義と安心』の修正について議論されたが、この書は教師教修のテキスト本として使用され、内容的にも完成されているので、これに修正を加えた書籍を出すことはしないことが合意された。ただ、この書は『安心論題綱要』をベースにやさしくしたものであるため、真宗の教義概説としては補足した方がよいと思われる点があるとの意見も強くあった。

勸学寮から出版され、勸学寮主催の研修会においてテキストとして用いられている書籍には①『新編 安心論題綱要』、②『釈尊の教えとその展開』、③『浄土三部経と七祖の教え』、があり、それぞれの内容は、①安心論題の概説、②仏教の概説、③三経・七祖の教えであるが、真宗の教義を概説した書籍がないため、一般僧侶が手にとって分かりやすい書籍を新たに作成するのが望ましいと決定した。その決定を受けて出版されたのが本書である。

本書の作成に当たっては、まず、内藤知康勸学を主任とし、森田真円司教（当時）・普賢保之司教・安藤光慈司教・高田文英輔教・井上見淳輔教を委員とした特設研究会を立ち上げた。

そして、寮員会議との情報共有を行いつつ四回の準備会によって、全体の構成、各章の執筆担当者を決定した。続いて、同じく寮員会議の指示・了承を受けつつ、十回の研究会を経て各執筆者から原稿の提出を受け、その後、研究員それぞれの意見交換を経て、内容の修正及び表現の統一を行い、その後主任の内藤知康勧学による加筆・修正を経た最終原稿について再度の表現統一作業を行い、完成に至ったのである。

本書は、すでにある研修会のためのテキストとして作成された『新編 安心論題綱要』等とは異なり、現在のところ勧学寮主催の研修会に本書をテキストとして用いる科目はない。本書は、各種研修会におけるテキストとして活用されるのが望ましいが、勧学寮として、本書をテキストとする科目を今後設けることも視野にあることを付言しておく。

平成二十九年三月

勧学寮頭 徳永 一道

## 目次

序	三
第一章 生死出づべき道	
第一節 仏道の目的	一二
第二節 親鸞聖人の苦悩	一六
第三節 法然聖人との出会い	二二
第四節 自信教人信の実践	三〇
第二章 阿弥陀仏とその本願	
第一節 阿弥陀仏	
第一項 二種法身	三七
第二項 仏の三身説	四三
第二節 本願とは	
第一項 菩薩の誓願	五一
第二項 一願建立と五願開示	五六
第三節 二回向四法	
第一項 二回向四法	六四
第二項 往生門と正覚門	六八
第三章 聖道の教えと浄土の教え	
第一節 親鸞聖人の仏教観	
第一項 二双四重の教判	七六
第二項 他力の仏道	八八
第三項 真実の教えと仮偽の教え	九九
第二節 真実の教えと方便の教え	
第一項 浄土三部経の教え	一〇五
第二項 三経の関連性	一一五

第三項 如来出世本懷の教え(阿弥陀仏と釈尊)……………一三三

## 第四章 念仏往生と信心正因

### 第一節 本願の念仏

第一項 定散諸善と念仏……………一四六  
第二項 正助二業……………一五五  
第三項 選択本願と乃至十念……………一六三  
第四項 第十七願建立の行……………一七四  
第五項 六字釈……………一八五

### 第二節 行と信

第一項 第十七願と第十八願の関係……………一九三  
第二項 聞名と信心……………一九六  
第三項 行の一念と信の一念……………二〇二  
第四項 信心正因・称名報恩……………二二二

### 第三節 眞実信心

第一項 他力の信心……………二二八  
第二項 信と疑……………二三三  
第三項 三心と一心……………二四一  
第四項 二種深信……………二五九

## 第五章 浄土眞宗の利益

### 第一節 現生の利益

第一項 現生十益……………二七〇  
第二項 弥勒と同じ・如来とひとし……………二八五  
第三項 現生正定聚の事態……………二九二  
第四項 現生正定聚の根拠……………二九九  
第五項 臨終と平生……………三〇二

### 第二節 当来の利益

第一項 往生即成仏……………三〇五  
第二項 往生の主体……………三〇七

第三項 還相の活動	三二五
第三節 救いと成仏	
第一項 現益と当益の別	三二三
第二項 俱会一処	三二七

\*『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈版聖典』、『浄土真宗聖典（註  
 釈版）七祖篇』は『註釈版聖典七祖篇』と略記する。

\*本書における『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』及び『浄土真宗聖典（註  
 釈版）七祖篇』以外を出典とする引用文については、表記の変更と読  
 み仮名の附記を勸学寮にて行った。

## 親鸞聖人の教え

# 第一章 生死出づべき道

## 第一節 仏道の目的

### 苦の解決

私たちの人生は、実にさまざまであり、それぞれの人生は苦しみや悩みに満ちている。阿弥陀仏の教えが説かれた「浄土三部経」の一つである『仏説観無量寿経』には、釈尊がお弟子の阿難陀と韋提希夫人に対して、以下のよう述べられる一節がある。

仏、阿難および韋提希に告げたまはく、「あきらかに聴け、あきらかに聴け、よくこれを思念せよ。仏、まさになんぢがために苦悩を除く法を分別し解説すべし。なんぢら憶持して、広く大衆のために分別し解説すべし」と。

（『註釈版聖典』九七頁）

人生の苦しみや悩み、その「苦悩を除く法」こそが仏法であり、ここに「まさになんぢがため」とあるのは、「この私のために」法が説かれることを示している。仏教とは、人生の苦を解決しさとりを開いた仏陀が、私たちの苦悩を除こうとして説示される教法なのである。

仏教に限らず、私たちの苦悩を除くための教えは、現代において数知れず存在している。たとえば、目の前に差し迫った困難に対して、神秘的な力を借りて解決しようとするもの。あるいは、強い指導力を持ったものの指図に従うことによって自らの苦悩の解決を得ようとするもの。さらには、自らの生活を浄化して、その効力によって問題の好転を期するもの等々、宗教の名のもとに説かれる教えは多種多様である。

しかしながら、一つ一つの苦悩をみれば、その困難のありようはさまざまであり、たとえ一つの困難が解決したとしても、次の困難が起こってきては、新たな苦悩が生まれてくる。それは、苦悩の根源が解決されていないからに他ならない。ではこのように次々と起こる苦悩の根源とはいったい何であろうか。人がさしたる困難もなく順風満帆の人生を送ったとしても逃れること

のできない問題、それは、老いること・病いにあうこと・死することであり、そしてそれらを抱えてしか生まれることができないという、生存そのもの持つ根源的な問題こそが苦悩の根源なのである。

仏教はこの生・老・病・死を、それぞれを生苦・老苦・病苦・死苦と示す。それは、生に迷い、老に迷い、病に迷い、死に迷い、煩惱の束縛から逃れることができずに苦悩する、この四苦こそが苦悩の根源であることを示している。釈尊出家の動機を示す『仏伝』の「四門出遊」も、生老病死の苦悩の解決こそが目指すべき道であることを説くものである。したがって、仏道を歩むとは、このような人間の逃れられない根源的な苦悩を乗り越えていく道を目指すのであり、仏陀の説かれる「苦悩を除く法」とは、「生老病死」の苦悩を除く法なのである。

### 生死出づべき道

親鸞聖人が目指された仏道も、生老病死の苦悩を乗り越えていく道であった。親鸞聖人の妻であった恵信尼公が、娘の覚信尼公に宛てて出された手紙（『恵信尼消息』）に次の一節がある。

法然上人にあひまゐらせて、また六角堂に百日籠らせたまひて候ひけるやうに、また百か日、降るにも照るにも、いかなるたいふにも、まゐりてありしに、ただ後世のことは、よき人にもあしきにも、おなじやうに、生死出づべき道をば、ただ一すぢに仰せられ候ひしを、うけたまはりさだめて候ひしかば、「上人のわたらせたまはんところには、人はいかにも申せ、たとひ悪道にわたらせたまふべしと申すとも、世々生々にも迷ひければこそありけめ、とまで思ひまゐらす身なれば」と、やうやうに人の申し候ひしときも仰せ候ひしなり。

（『註釈版聖典』八一頁）

これは、後に述べるように、親鸞聖人が師法然聖人に出会われた時の様子を語ったものであるが、ここに示されている「生死出づべき道」とは、「生死」すなわち生老病死という根源的な問題を解決し、さまざまな煩惱の束縛から解き放たれ、生死流転の迷いのあり方から離脱し、寂靜のさとりに至る道である。すなわち、親鸞聖人がかねてより求められていた道は、迷いからさと